

夕方の九品仏

五月雨の降りしきる中
そびえ立つ九品仏浄真寺の大木
来てみると根方に二本の傘が幹の両側から見えた
斜めにつきささつてゐるかのやうだ
右側は男ものの大きいかうもり
左側からは色ものの小ぶりの傘がゆれてゐた
やがて若い男と女が現れてこちらの方に歩いてきた
僕は男の顔を僕の顔に変へ
女の顔を何十年か前の女の顔に変へ
着せかへ人形のやうにして
男の洋服を僕の洋服に
女の洋服をあの時の女の洋服に変へ
二人を大木の方へ押しもどした
大木の影に入った僕は女を抱いてくちづけした
やはらかい五月雨のやうにねばつく
離れた所から十人目の観察者の僕の声がよびかけた
「もう少し傘を立てるやうにしてごらんなさい」
僕が傘を立てるやうにしてみせた
「それでやつと前と同じになつた」
僕は前といふのは何時の事かなと思つた
あの茅ぶきの屋根の頃のことだらうか
それとも着せかへる前のあの男女の時のことだらうか
境内の方々にひろい水たまりが出来てゐた
雨足は白くいよいよはげしくなつた
あの男と女はいまどこを歩いてゐることであらう
僕はひそかに考へた